令和7年度

日章学園

鹿児島育英館高等学校

入学試験問題

国語

(時間 45 分)

(注意)

- 1 「始め」の合図があるまで、このページ以外のところを見てはいけません。
- 2 問題は、10 ページあります。解答用紙は1枚です。
- 3 「始め」の合図があったら、まず解答用紙に受験番号、中学校名、氏名を記入しなさい。
- 4 答えは、必ず解答用紙に記入しなさい。
- 5 印刷がはっきりしなくて読めないときは、だまって手をあげなさい。問題内容や答案作成上の質問は認めません。
- 6 「やめ」の合図があったら、すぐ筆記用具をおき、解答用紙だけを裏返しにして、机の上におきなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① 人間はいつからこんなに夜行性をつよめたのであろうか。もちろん昼間働くのが常態であるが、こと、知的活動になると、夜ときめてしまう。灯火親しむの候、などということばは電灯などのない昔から、読書は夜するものという考えがあったことを示している。

そして、いつのまにか、^①夜の信仰とも言うべきものをつくりあげてしまった。現代の若ものも当然のように宵っ張りの朝寝坊になって、勉強は夜でなくてはできないものと、思いこんでいる。朝早く起きるなどと言えば、老人くさい、と笑われるシマツである。

夜考えることと、朝考えることとは、同じ人間でも、かなり違っているのではないか、ということは何年か前に気づいた。朝の考えは夜の考えとはなぜ同じではないのか。考えてみると、おもしろい問題である。

② 夜、寝る前に書いた手紙を、朝、目をさましてから、読み返してみると、どうしてこんなことを書いてしまったのか、とわれないが不思議である。

外国で出た手紙の心得を書いた本に、感情的になって書いた手紙は、かならず、一晚そのままにしておいて、翌日、読みかえしてから投函せよ。一晚たってみると、そのまま出すのがためらわれることがすくなくない^A。そういう注意があった。現実的な知恵である。

それに、どうも朝の頭の方が、夜の頭よりも、優秀であるらしい。夜、さんざんてこずって、うまく行かなかった仕事があるとする。これはダメ。明日の朝にしよう、と思う。心のどこかで、「きょうできることをあすに延ばすな」ということわざが頭をかすめる。それをおさえて寝てしまう。

朝になって、もう一度、挑んでみる。すると、どうだ。ゆうべはあんなに手におえなかった問題が、するすると片づいてしまっではないか。昨夜のことがまるで夢のようである。

はじめのうちは、そういうことがあっても、偶然だと思っていた。夜の信者だったからであろう。やがて、これはおかしいと考えるようになった。偶然にしては同じことがあまりにも多すぎる。おそまきながら、朝と夜とは、^③同じ人間でありながら、人が違うことを思い知らされたというわけである。

③ 朝飯前^シ ということばがある。手もとの辞書をひくと、「朝の食事をする前。『そんな事は朝飯前だ』(＝朝食前にも出来る

ほど、簡単だ」(『新明解国語辞典』)とある。いまの用法はこの通りだろうが、もとはすこし違っていたのではないかと疑い出した。

簡単なことだから、朝飯前ではなく、朝の食事の前にするために、本来は、決して簡単でもなんでもないことが、さつさとできてしまい、いかにも簡単そうに見える。知らない人間が、それを朝飯前と呼んだというのではあるまいか。どんなことでも、朝飯前にすれば、さつさと片付く。朝の頭はそれだけ能率がいい。

おもしろいことに、朝の頭は楽天的であるらしい。前の晩に仕上げた文章があつて、とてもこれではいけない。明日になつてもう一度、書き直しをしよう、などと思つて寝る。一夜明けて、さっぱりした頭で読み返してみると、まんざらでもないという気がしてくる。これでよいことにしようと考えなおす。

感情的になつて書いた手紙は、朝の頭で再考すると、落第するけれども、すべてをコバムわけではない。いいところがあれば、素直に認める大らかさもある。

④ そういうことが何度もあつて、それまでの夜型の生活を朝型に切りかえることにした。四十歳くらいのときである。まだ、それほどの年ではないが、老人がたいてい、いつのまにか朝型になっている。あんな夜型だったのにと思う人までが、朝のうちでないと仕事ができないと言ふのをきいたこともある。

朝の仕事が自然なのである。朝飯前の仕事こそ、本道に行くもので、夜、灯をつけてする仕事は自然にさからつてゐるのだ。若いうちこそ、糶がつて、その無理をあえてする。Ⅰ、それだけの体力もある。Ⅱ、年をとつてくると、無理がきかなくなり、自然に帰る。朝早く目がさめて困るといふようになる。

それで、まだそれほどの年でもないうちに、老人を見倣おうと思つて、夜していた仕事を朝へまわすことにした。と言つて、そんなに早起きのできるわけがない。ゆっくり起きるから、朝飯前の仕事などなかなか望むべくもない。これは何とかしなくてはいけないと考へた。

英雄的早起きはできないが、朝のうちに、できることなら、朝飯前になるべくたくさんのことをしてしまいたい。それにはどうしたらいいのか。答は簡単である。

Ⅲ

八時におきて、八時半に食事をしていたのでは、朝飯前の仕事など絵に描いた餅。朝食をしなければ、八時におきて、すぐ、仕事を始められる。朝食抜きというのは当たらない。ひるまでおくらせる。朝食と昼食を同時にとると言った方がおだやかで

ある。これが決して異常なことでないのはブランチ (brunch 昼食兼用のおそい朝食。breakfast+lunch) ということばがあるのもわかる。

こうすれば、ひるまではすべて **IV** 前の時間、そこですることはすべて、**IV** 前ということになって、はなはだ都合がよろしい。

5 だいたい、胃袋に何か入れたあとすぐ、頭を使うのはよくない。消化のために血液がとられて、頭はぼーっとする。それが当り前で、学校の生徒が、午後の授業で睡眠に襲われるのは健康な証拠である。ああいう時間に勉強させようというのがそもそも間違っている。

猛獣の訓練をするのは、空腹のときに限るのだそう。腹がふくれたら、どんなことをしても動くものではない。動物は人間よりも自然の理にチュウジツなのである。人間は意志を働かせて、無理をする。眠くなっても眠るまいとする。

ときにはそういうことも必要であろうが、そうそういつもしてはいけない。食後はゆっくり休む。そのかわり、食前はすべてを忘れて仕事に神経を集中させる。これには午前中をすべて朝食前にするのがよろしい。八時に起きても四時間ある。その間に、その日の仕事をすませてしまう。

わたくしはそういうことを続けて、ほぼ二十年になる。

6 そのうちに、もうひとつの手を考えた。朝食兼昼食をゆっくりとすると、そこで、ひと眠りする。外で用事のあるときは、それも行かないが、一日自由になる日は、寝る。その辺でゴロ寝、というのではない。ふとんをしいて、本格的に寝てしまう。やがて目がさめる。いったい、いまは何時だろう。ずいぶんけさは寝坊してしまつて……と、一瞬、ひるさがりを朝と取り違えるようであれば、たいへん効果的である。それをもって、自分だけの朝とするのである。

顔を洗って、歯をみがく朝の儀式をすれば、陽がどの高さにあるかなどは問題でなくなり、ここで新しい一日が始まる。しかし、朝食はとらない。夕方に、朝食と夕食を兼ねたご馳走を食べる。それまでの時間はすべてこれ、朝飯前の時間である。こうすれば、一日に二度、朝飯前の時間ができる。つまり、一日が二日になる。実際、こうして、午後の三時か三時半ごろから夕方の六時、七時までの時間も、かなりよく頭が働いてくれる。

ものを考えるのに、時間を選ぶことはないと思っている人がすくなくないけれども、ものを食べたあとがよろしくないのははつきりしている。体の疲れたときも適当でない。

だとすると、

V

朝のうちが最高の時間であることは容易に理解される。いかにして、朝飯前の時間を長くす

るか。

(外山滋比古「思考の整理学」より)

問一 傍線部 a と e のカタカナは漢字に直し、漢字は平仮名に直して書きなさい。

問二 傍線部①「夜の信仰とも言うべきもの」とあるが、どのようなことですか。「——ということ」につながるように、文章中から二十四字で書き抜きなさい。

問三 傍線部②「夜、寝る前に書いた手紙」とあるが、どのような手紙ですか。文章中から十二字で書き抜きなさい。(句読点含む)

問四 波線部 A 「ない」と働きが同じものを次から一つ選び記号で答えなさい。

ア 私と彼の母親は面識がない。

イ そのテレビは面白くない。

ウ 雪の量が去年より少ない。

エ 初日の出の美しさを忘れない。

問五 傍線部③「同じ人間でありながら、人が違うこと」とはどういうことですか。簡潔に説明しなさい。

問六 空欄ⅠとⅡに入る接続詞の組み合わせとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア a そして b つまり

イ a しかし b すると

ウ a しかも b なぜなら

エ a また b ところが

問七 空欄Ⅲに入る文として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア もっと早く起きればいい。

イ 朝食を抜けばいい。

ウ 仕事の量を減らせばいい。

エ 朝食を先に食べればいい。

問八 空欄Ⅳに入ることばとして適切なものを漢字二字で書き抜きなさい。

問九 [5]段落は[4]段落に対してどのような関係にありますか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア [4]段落の内容に即して、さらに具体例を補足している。

イ [4]段落の内容を離れて、新たな話題を提示している。

ウ [4]段落の内容を受けて、さらに論を展開している。

エ [4]段落の内容に関して、新たな視点を示し比較している。

問十 空欄Ⅴに入る適切な文章を考え簡潔に書きなさい。

問十一 次の会話はこの文章を読んだ4人の生徒の会話です。空欄にあてはまるものとして最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

生徒A 私も早寝早起きをしている朝型の人と、遅寝遅起きをしている夜型の人の勉強やスポーツの成績の比較では、いずれの成績も朝型の人の方が夜型の人より良い傾向にあるっていう研究報告をみたことがあるよ。

生徒B うん。私が見た文部科学省が実施した調査では、朝食を毎日食べている子供とそうでない子供とでは、朝食を毎日食べていると回答した子供の平均正答率や体力合計点が高いという結果もでていたよ。

生徒C

生徒D たしかにそうだね。記憶の整理・定着をするレム睡眠は、ノンレム睡眠をしっかりとったあとに多く出現するということから、新しく学んだ知識や運動の技能をしっかりと脳に定着させるためには早く寝てしっかりと睡眠をとった方がいいね。

ア スポーツの世界では、身体を作り、体力をつけるため、運動・食事・睡眠・休養のバランスが大事であることは常識で、「早寝早起き朝ご飯」を実践している人が多いっていうよね。

イ 朝型の人は元々健康への意識が高いから、食事の量や食べる時間、栄養バランスにもこだわった生活をしていて、食生活に乱れがないようだね。

ウ 芸術の分野でも朝型の人の美的感覚や音楽のセンスは優れているようで、夜型の人より芸術家として大成する人が多く、朝型の生活を取り入れている芸術家は多いと聞くよ。

エ 朝型の人は昼間に眠気に襲われる人が多く、それは仕方のないことだから、昼寝を有効活用することで、昼間の授業や仕事の効率を上げているという話も知っているよ。

オ 逆に夜型の人は朝活動することがないから、朝の慌ただしさに追われることなく、ゆっくり食事ができるし、夜に自分のペースで学習したり、トレーニングに励んだりすることで、良い成績をおさめているようだね。

二

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

① 十月早稲田に移る。伽藍がらんのような書齋にただ一人、片づけた顔を頬杖ほおづえで支えていると、三重吉が来て、鳥を御飼いなさいと云う。飼ってもいいと答えた。しかし念のためだから、何を飼うのかねと聞いたたら、文鳥ですと云う返事であった。

② 文鳥は三重吉の小説に出て来るくらいだから綺麗な鳥に違ちがなからうと思つて、じゃ買つてくれたまえと頼んだ。ところが三重吉は是非御Aかいなさいと、同じような事を繰り返している。うむかうよかうよとやはり頬杖を突いたままで、むにゃむにゃ云つてるうちに①三重吉は黙ってしまった。おおかた頬杖に愛想を尽かしたんだらうと、この時始めて気がついた。

③ すると三分ばかりして、今度は籠を御かいなさいと云いだした。これも宜しいと答えると、是非御Bかいなさいaと念を押す代りに、鳥籠かごの講釈を始めた。その講釈はだいぶ込み入ったものであったが、気の毒な事に、みんな忘れてしまった。ただ好いのは二十円ぐらいすると云う段になって、急にそんな高価でなくとも善からうと云つておいた。三重吉はにやにやしている。

④ それから全体どこで買うのかと聞いて見ると、なにどこの鳥屋にでもありますと、実に平凡な答をした。籠はと聞き返すと、籠ですか、籠はその何ですよ、なにどこにかあるでしょう、とまるで雲をつかむbような寛大な事を云う。でも君あてがなくなつちやいけなからうと、
I いけないような顔をして見せたら、三重吉は頬ぺたへ手をあてて、何でも駒込に籠の名人がある

そうですが、年寄だそうですから、もう死んだかも知れませんが、非常に心細くなってしまった。

5 何しろ言いだしたものに責任を負わせるのは当然の事だから、さっそく万事を三重吉に依頼する事にした。すると、すぐ金を出せと云う。金はたしかに出した。三重吉はどこで買ったか、七子の三つ折の紙入を懐中^こして、人の金でも自分の金でも悉^{ことごとく}皆この紙入の中に入れる癖がある。自分は三重吉が五円札をたしかにこの紙入の底へ押し込んだのを目撃した。

6 かようにして金はたしかに三重吉の手に落ちた。しかし鳥と籠とは容易にやって来ない。

7 そのうち秋が小春になった。三重吉はたびたび来る。よく女の話などをして帰って行く。文鳥と籠の講釈はⅡ 出ない。硝子戸^{がらすと}を透して五尺の縁側には日が好く当る。どうせ文鳥を飼うなら、こんな暖かい季節に、この縁側へ鳥籠を据えてやった。文鳥も定めし鳴き善かろうと思うくらいであった。

8 三重吉の小説によると、文鳥は千代千代と鳴くそうである。その鳴き声がいぶん気に入ったと見えて、三重吉は千代千代を何度となく使っている。あるいは千代と云う女に惚^ほれていた事があるのかも知れない。しかし当人はいっこうそんな事を云わない。自分も聞いてみない。ただ縁側に日が善く当る。② そうして文鳥が鳴かない。

9 そのうち霜が降り出した。自分は毎日伽藍のような書齋に、寒い顔を片づけてみたり、取乱してみたり、頬杖を突いたりやめたりして暮していた。戸は二重に締め切った。火鉢に炭ばかり継いでいる。文鳥はついに忘れた。

10 ところへ三重吉が門口から威勢よく這^は入って来た。時は宵の口であった。寒いから火鉢の上へ胸から上を翳^{かざ}して、浮かぬ顔をわざとほてらしていたのが、急に陽気になった。三重吉は豊隆を従えている。豊隆はいい迷惑である。二人が籠を一つずつ持っている。その上に三重吉が大きな箱を兄き分に抱えている。五円札が文鳥と籠と箱になったのはこの初冬の晩であった。

11 三重吉は大得意である。まあ御覧なさいと云う。豊隆その洋灯をもっとこちへ出せなどと云う。そのくせ寒いので鼻の頭が少し紫色になっている。

12 なるほど立派な籠ができた。台^{たが}が漆で塗^{うるし}ってある。竹は細く削った上に、色が染けてある。それで三円だと云う。安いなあ豊隆と云っている。豊隆はうん安いと云っている。自分は安いか高いか判然と判らないが、まあ安いなあと云っている。好いものになると二十円もするそうですと云う。二十円はこれで二返目である。二十円に比べて安いのは無論である。

13 この漆はね、先生、日向へ出して曝^{さら}しておくちに黒味が取れてだんだん朱の色が出て来ますから、——そうしてこの竹は一返善く煮たんだから大丈夫ですよなどと、しきりに説明をしてくれる。何が大丈夫なのかねと聞き返すと、まあ鳥を御覧なさい、奇麗でしょうと云っている。

14 なるほど奇麗だ。次の間へ籠を据えて四尺ばかりこっちから見ると少しも動かない。薄暗い中に真白に見える。籠の中にならずくまっていなければ鳥とは思えないほど白い。何だか寒そうだ。

15 寒いだろうねと聞いてみると、そのために箱を作ったんだと云う。夜になればこの箱に入れてやるんだと云う。籠が二つあるのはどうするんだと聞くと、この粗末な方へ入れて時々行水を使わせるのだと云う。これは少し手数が掛るなど思っている、それから糞をして籠を汚しますから、時々掃除をしておやりなさいとつけ加えた。三重吉は文鳥のためにはなかなか強硬である。

16 それをはいはい引受けると、今度は三重吉が袂たもとから粟を一袋出した。これを毎朝食わせなくっちゃいけません。Ⅲ 餌をかえてやらなければ、餌壺を出して殻だけ吹いておやんなさい。そうしないと文鳥が実のある粟を一々拾い出さなくっちゃなりませんから。水も毎朝かえておやんなさい。先生は寝坊だからちようど好いでしょと大変文鳥に親切を極めている。そこで自分もよろしいと万事受合った。ところへ豊隆が袂から餌壺と水入を出して行儀よく自分の前に並べた。こういっさい万事を調べておいて、実行を逼せまられると、義理にも文鳥の世話をしなければならなくなる。内心ではよほど覚束おぼつかなかったが、まずやってみようとまでは決心した。もしできなければ家のものが、どうかするだろうと思った。

17 やがて三重吉は鳥籠を叮嚀ていれいに箱の中へ入れて、縁側へ持ち出して、ここへ置きますからと云って帰った。自分は伽藍のような書齋の真中に床を展のべて冷かに寝た。夢に文鳥を背負い込んだ心持は、少し寒かったが眠ってみれば不断の夜のごとく穏かである。

18 翌朝眼が覚めると硝子戸に日が射している。たちまち文鳥に餌をやらなければならぬと思った。けれども起きるのが退儀たいぎであった。今にやろう、今にやろうと考えているうちに、とうとう八時過になった。仕方がないから顔を洗うついでをもつて、冷たい縁を素足で踏みながら、箱の蓋ふたを取って鳥籠を明海へ出した。文鳥は眼をぱちつかせている。もつと早く起きたかたろうと思つたら気の毒になつた。

19 文鳥の眼は真黒である。瞼まぶたの周囲に細い淡紅色の絹糸を縫いつけたような筋が入っている。眼をぱちつかせるたびに絹糸が急に寄って一本になる。と思うとまた丸くなる。籠を箱から出すや否や、文鳥は白い首をちよつと傾けながらこの黒い眼を移して始めて自分の顔を見た。そうしてちちと鳴いた。

20 自分は静かに鳥籠を箱の上に据えた。文鳥はぱつと留り木を離れた。そうしてまた留り木に乗った。留り木は二本ある。黒味がかつた青軸をほどよき距離に橋と渡して横に並べた。その一本を軽く踏まえた足を見るといかにも華奢きゃしゃにできている。細長い薄紅の端に真珠を削つたような爪が着いて、手頃な留り木を甘く抱え込んでいる。すると、ひらりと眼先が動いた。文鳥

はずでに留り木の上で方向を換えていた。しきりに首を左右に傾ける。傾けかけた首をふと持ち直して、心持前へ伸したかと思つたら、白い羽根がまたちらりと動いた。文鳥の足は向うの留り木の真中あたりに具合よく落ちた。ちちと鳴く。そうして遠くから自分の顔を覗き込んだ。

(夏目漱石「文鳥」より)

問一 傍線部aとeの語句の意味として最も適当なものを語群から選び記号で答えなさい。

a 念を押す (ア) 励ます イ 落ち込む ウ たしかめる エ あきらめる

b 雲をつかむ (ア) たのしむ イ はっきりしない ウ あこがれる エ 想像がつかない

c 懐中 (ア) なつかしむ イ 持っている ウ 直す エ 仲がよい

d 退儀 (ア) 辞める イ あわれだ ウ 劣っている エ 面倒だ

e とや否や (ア) すぐに イ ことわる ウ どうして エ 嫌がる

問二 傍線部A、Bの「かいなさい」に、本文に合う漢字を当てはめて、それぞれ書きなさい。

問三 空欄IとIIIには、呼応の副詞が入ります。次から最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア もし イ ぜひ ウ 全く エ あたかも オ たとえ

問四 傍線部①「三重吉は黙ってしまった」とありますが、なぜ三重吉は黙ったと「自分」は考えていますか。わかりやすく説明しなさい。

問五 「自分」が、文鳥を心待ちにしているのがわかる一文を、5と9段落の中から探し、最初の五字を答えなさい。

問六 傍線部②「そうして文鳥は鳴かない」とはどういうことですか。わかりやすく説明しなさい。

問七 傍線部③「威勢よく這入って来た」とありますが、このときの三重吉の様子から読み取れる心情として、適当でないものを次から一つ選び記号で答えなさい。

ア 得意 イ 興奮 ウ 陽気 エ 愛想 オ 喜喜

問八 夏目漱石の作品を、次のアとオの中から選び記号で答えなさい。

ア たけくらべ イ 走れメロス ウ 銀河鉄道の夜 エ 羅生門 オ 坊ちゃん

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

城陸奥守康盛は双なき馬乗りなりけり。馬を引き出させけるに、足を揃へてⅠ闕※（しきみ）をゆらりと越ゆるを見ては、「これは勇める馬なり」とて、鞍（くら）を置き換へさせけり。また、足を伸べて闕に蹴当てぬれば、「これは鈍くして、あやまちあるべし」とて、乗らざりけり。道Ⅲを知らざらん人、かばかり恐れなむや。④

※闕（しきみ）：門戸の内外の区切りのために下に敷く横木。

問一 傍線部①「双なき」②「あやまち」③「道」の意味として最も適当なものをそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア 道路

イ 損害

ウ 仕方がない

エ 専門の分野

オ 大したことのない

カ 失敗

キ 並ぶものがない

ク 地理

ケ 謝罪

問二 二重傍線部Ⅰ「馬を引き出させけるに」、Ⅱ「ゆらりと越ゆる」、Ⅲ「乗らざりけり」について、主語をそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア 泰盛

イ 闕

ウ 馬

エ 道

オ 足

問三 波線部④「かばかり恐れなむや」の「や」は、「くだらうか、いやくだではない」と口語訳をします。このような表現法を何と言いますか。漢字二文字で答えなさい。

問四 この話は、あることわざの意味とは反対の内容です。そのことわざとは何ですか。次から選び、記号で答えなさい。

ア 覆水盆に返らず

イ 馬の耳に念仏

ウ 弘法筆を選ばず

エ 後は野となれ山となれ

問五 次の文章は、本文についての説明です。（ ）の中に入る語句を漢字で書きなさい。

この文章は、（ 1 ）時代に、兼好法師の書いた（ 2 ）の第百八十五段です。随筆文学として有名で、清少納言の（ 3 ）、（ 4 ）の書いた方丈記と並んで、三大随筆と言われています。